****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 334 号
－環境・農業・食べ物など情報の交流誌－
2012.05.25（金）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.yamazaki-i.org
**********発行部数 ☆☆ 部**********

□ 目 次 □----------

＜巻頭言＞　「がれき」は資源！――“広域処理”よりも“地元活用”が
良いのでは…？　塩谷哲夫
＜読者から＞　明日を信じ、今日の務めの仕事するだけ
＜イベント案内＞
内山節　講演会「3・11 以降を生きる―新しい価値の創造と共有―」
（2012 年 6 月 9 日　東京都北区　赤羽エコー広場館）
＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.127』発行されました
＜編集後記＞　田んぼの草花に思う

＜巻頭言＞　「がれき」は資源！――“広域処理”よりも“地元活用”が良いのでは…？

今年の 3 月、政府が宮城・岩手両県の震災がれきのうち 400 万トン（総量 2045 万トン）の「がれき広域処理」を呼びかけたときに、“ひねくれ者”の私は…こんなことを考えた。

◇◇◇◇◇◇

「がれき」を遠くに運んで処理することは予算（国民の金）の無駄遣いなのではないか？　「産廃処理業者」を名乗る業界に大金を配ることになりはしないか？　がれきを積んだトラック 1 台、最遠の鹿児島までに走らせたらいくらかかる？　そこでの処理にはいくらかかるのだろう？　処理済み物はどれだけの価値を生み出すのだろうか？

それよりも、地元に大きな処理場を建設して、地元の人を雇って復興事業と

してやったほうが良いのではないか？　「がれき」という運搬効率の悪い粗大物質を、遠くまで、「帰り荷」の当てもなく運ぶよりも、採算性が高いし、被災地の人々の雇用拡大にもなるはずだ。

可燃物は熱エネルギー源として発電に使える。がれきがなくなっても東北の膨大な森林の間伐材を活用すれば木質燃焼発電所が稼動できる。そして、間伐は森林を蘇らせる。
木屑は木質ボードなどに加工しても使える。青森県では既に超硬度で多用な機能を持ったウッドセラミックへの加工技術を開発している。
自動車や家電などは解体して再資源化できる。東北には小坂町などに旧鉱山の精錬技術を活かした金属資源のリサイクルの技術があり、企業もある。
コンクリートなどは土木などの建設資材としていくらでも使い道がある。被災地復興のための防潮堤や防潮林の土台にもなる。かつて、横浜の山下公園は関東大震災（1923 年）のがれきを埋め立てて築かれたと言う。

こんなふうに、「がれき」は多くの価値を産む資源になるのではないだろうか？　誰か、社会的、経済的、政治的…価値・効果を比較計算してみてくれないだろうか？

◇◇◇◇◇◇

自分たちの策と力の無さを、協力を迷っている自治体をまるで“非国民”呼ばわりしてごまかそうなんて、うっかりするとなんとか業界や裏社会とつるんでるのじゃないのかと思ってしまう。「メディア」もグルかな？　気がつかないはず無いのに。

政府が文書で協力要請した 35 道府県＋10 政令指定市のうち、17＋5 が「前向き」回答をしたらしい（「朝日新聞」4.17 夕刊」）。どこの自治体ももともと「ゴミ処理」では困っているのだから、先が思いやられる。
政府は、被災地復興事業の一貫として、がれきの“広域処理”よりも“地元活用”に取り組んでもらえないだろうか。

“広域処理”よりも、私は被災地の復興資源として“地元活用”に頭を働かせ、お金も使ってほしいと思ったわけである。間違っているかな…と思って、3.11 当時石巻の高校の校長先生をしていた友人に話してみたら、「地元では、そう思っている人が沢山いるよ。その意見、どんどん言ってよ」と言われた。

※「がれき」はさまざまな問題を抱えていて一筋縄では扱えないことは承知していますが、地元の声に後押しされて発信しました。

塩谷哲夫
山崎農業研究所幹事・東京農工大学名誉教授
yamazaki@yamazaki-i.org

＜読者から＞　明日を信じ、今日の務めの仕事するだけ

福島市の果樹地帯を歩いた。剪定枝が畑の片隅にうず高くある。汚染されているから移動も焼却も禁止されている。

樹園地は、1 本、1 本荒皮を剥ぎ、水で高圧洗浄をした。さらに何人かは、土壌表面数センチを削り取る作業をしている。だが、その土も行き場のないまま山となっている。

生産者は、云われるままに自分の畑を「これが除染だ」という上からの指示に従って汗を流してきた。流した汗と同じように、放射能も流れ去ってくれたか。

目に見えない放射能におろおろしながら、豊かな実りを信じいつもどおりの仕事をしていた。（5 月 18 日、K・K）

＜イベント案内＞
内山　節　講演会「3・11 以降を生きる―新しい価値の創造と共有―」
（2012 年 6 月 9 日　東京都北区　赤羽エコー広場館）

■哲学塾東京分校（の・ようなもの）セミナー（第 12 回）
内山　節　講演会 ＆ 交流の集いのご案内
「3・11 以降を生きる―新しい価値の創造と共有―」

◎日時＝2012 年 6 月 9 日（土）　13:00～17:00
12：30～　受付開始

13：00～　内山節講演会
講演終了後、交流会（休憩時間を利用しての参加者相互の交流、質疑応答を中心に自由討議。新たな出会いと発見の＜場＞にしたいです。）

◎テーマ＝「3・11 以降を生きる―新しい価値の創造と共有―」
《参考文献》
内山節著『ローカリズム原論―新しい共同体をデザインする』（農文協）
内山節「哲学は未来をどう語れるか―震災復興と脱原発から考える生命、自然、労働」（昨年のセミナーの講演記録　農文協「季刊地域」No.7,8 掲載）

◎場所＝東京都北区　赤羽エコー広場館　集会室
〒115-0045　東京都北区赤羽 1-1-38　電話　03-3908-3196
JR 京浜東北線、埼京線　赤羽駅南口　高架下　徒歩 2 分
（昨年と同じ場所です。）

◎会費＝1,000 円（資料代、飲食代（休憩時にお抹茶席を用意）等含む。）

◎懇親会＝セミナー終了後、内山さんを囲んでの懇親会を開催します。多彩な参加者同士の交流、出会いの機会でもあります、お気軽に御参加ください。
（希望者のみ　会費　均等割り 4,000 円ぐらい。）

※会場や準備の都合がございますので（定員 50 人程度）、参加御希望の方は、懇親会参加の有無も含めて、事前に世話人まで御連絡いただければ幸いです。

主催＝哲学塾東京分校（の・ようなもの）
世話人：石橋浩治　携帯 090-9837-8989　spacecaravan@hotmail.co.jp
長谷部恒雄　携帯 090-8944-6364　tsuneo.h@alpha.ocn.ne.jp

＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.127』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.127』が発行されました。
ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。
yamazaki@yamazaki-i.org
までご連絡ください。

目次（抜粋）

《土と太陽と》（巻頭言）
農地の放射能汚染問題の解明◎塩沢 昌
［第 37 回研究所総会・総会記念シンポジウム］
■総会記念シンポジウム「東日本大震災と農業・農村」
⑴東日本大震災による農業インフラの被災状況◎渡邊 博
⑵福島―希望への道筋を探りながら◎戎谷徹也
⑶風評被害を乗り越える経営力を求めて
　―東海 JCO からフクシマ◎照沼勝浩
［特別寄稿］
放射性物質汚染の過度な危険視が農業復興を阻む◎西尾道徳
土壌生成理論・腐植前駆物質による放射能汚染対策の
可能性について◎高味充日児
〈連載〉畦道・赤トンボのナショナリズム［18・最終回］
情愛のふるさと／宇根 豊

＜編集後記＞　田んぼの草花に思う

先日、地元の仲間たちと田植えをした。さいたま市の荒川河川敷にある小さな田んぼ。ここで田植えをするのはこれで 3 回目である。

田んぼをやりたいというのは永年の夢だったから、最初の年は皆、ともかく張り切った。そして翌 2011 年。雨が続き、田植えはなんどか順延となった。これが最後のチャンス！　という日も小雨の中での作業だったような気がする。それに 3.11 からそう間もない頃だったので、わたしのほうも心にゆとりがなかったのだろう。悲しいことにほとんど記憶にない。

それから 1 年が過ぎた。今回は晴天のなかでの田植えであった。田んぼに着いたわたしは、畦草をていねいに見て回った。ジシバリ、ウマノアシガタ、ヘビイチゴ、サギゴケ、キュウリグサ、ハルジョンなどなど、たくさんの草花がそこには咲き乱れていた。

田んぼの持ち主である T さんによると、今年は田んぼでドジョウがたくさん生まれて、それを食べにやって来るサギが多い。鳥といえば、このあたりは湿田地帯なので葦（ヨシ）が多く野ネズミもいて、それを食べるフクロウもいるん

ですよ、と。

田んぼや畦の向こうには富士山も見える。そんな田園風景をながめながら心の中で「いいなぁ」という言葉を連発したのだが、あらためて考えたのは、田んぼをつくり続けることによって、草花や生きものの命の循環が保証されるということであった。

もちろんこのことは、宇根豊さん（農と自然の研究所）が繰り返し繰り返し述べていることなのである。だが、3.11 以降、もっといえば東京電力福島第一原発事故以降、とかくわたしの意識は放射能問題に向かいがちであった。畦草や生きものへの関心は“その次”となっていた。

だからこそ、と言っていいと思うのだが、田んぼに直接向かい合いながら、畦の草花や生きもの、そして風景に感動できたことがうれしかったし、そう感じられることがとても貴重なことに思えてならなかったのである。

2012 年 05 月 25 日
山崎農業研究所会員・田口　均
yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考――グローバリゼーションの次は何か』
（発売：2008/11　定価：1,575 円 ）
http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/
たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）
グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ
http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html
◎戎谷徹也さん（大地を守る会）
ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”
「自給率」の前に、「自給」の意味を
http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/
◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）
キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん（拓殖大学政経学部）

ブログ：代替案　書評：『自給再考　－グローバリゼーションの次は何か』

http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0

◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）

ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」

http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

http://www.rircl.jp/shiryo.htm

◎日本農業新聞／書評

（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）

http://yamazaki-i.org/

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎小谷敏さん（大妻女子大学）

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）

http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219

◎白崎一裕さん（(株) 共に生きるために）

月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

http://yamazaki-i.org/

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎塩見直紀さん（半農半 X 研究所、執筆者）

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1 回 1 テーマ、10 行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回　335 号の締め切りは 06 月 04 日、発行は 06 月 07 日の予定です。

＜本誌記事の無断転載を禁じます＞
****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 334 号
最新号・バックナンバーの閲覧
http://archive.mag2.com/0000014872/index.html
http://nazuna.com/tom/denshico.html
購読申し込み／解除案内
http://www.yamazaki-i.org
2012.05.25（金）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
mailto:yamazaki@yamazaki-i.org
**********ここまで『電子耕』**********